

処方番号：46B

処方名：桂枝加芍薬大黄湯（けいしかしゃくやくだいおうとう）

処方構成：

桂枝 4、芍薬 6、大棗 4、生姜 1-1.5、甘草 2、大黄 1-2

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはそれ以下で腹部膨満感、腹痛があり、便秘するものの次の諸症

効能・効果：

便秘、しぶり腹

原典：傷寒論

出典：

解説：

別名：桂枝加大黄湯

漢方にいう「温下の剤」である。下剤を大別すると、「寒下の剤」と「温下の剤」がある。寒下剤は大黄や芒硝のような寒薬を主体にした大承気湯、小承気湯などをいい、温下剤は同じ寒剤を用いても、細辛、附子、桂枝などの温薬を配合してある本方のようなものをいう。

本方は『傷寒論』において、諸薬方発展の基幹をなす。「桂枝湯」を基にした加減方の一である。すなわち、桂枝湯の証に腹筋が拘攣して腹痛があり、また満腹感のあるものに、さらに便秘や結腸炎など伴ったものに用いる。

46B.桂枝加芍薬大黃湯

参考文献名		桂枝	生姜	大棗	甘草	芍薬	大黃
診療医典	注1	4	4	4	2	6	1
治療の実際	注2	4	4	4	2	6	1
処方解説		4	4*	4	2	4	1
応用の実際	注3	4	4	4	2	6	1~2
基礎と診療							
漢方処方集	注4	3	3	3	2	6	
処方分量集		4	4	4	2	6	1
漢方処方		4	1	3	2	6	1

* 乾生姜に代えるときは1.5を用う。

〔注1〕 腹がはって大便は出たいが、気持ちよく通じないもの。または、便秘しているが、強い下剤を用いると、かえって腹が痛んで気持ちのよい通じのつかないものなどの、直腸炎、直腸狭窄、大腸炎。

〔注2〕 夜に腹がはって安眠できぬもの、また、しぶり腹。

〔注3〕 虚弱な体質で胃アトニーばかりでなく腸もまたアトニー状になって、排便した後またすぐに便意を催すようなものの下痢や頑固な便秘、腸炎、頭痛、発熱、肩こり。

〔注4〕 虚症の腹満腹痛、便秘または下痢、急性慢性腸カタル、大腸カタル、急性慢性虫垂炎、常習便秘、痔。

処方番号：47

処方名：桂枝加朮附湯（けいしかじゅつぶとう）

処方構成：

桂枝 4、芍薬 4、大棗 4、生姜 1-1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、蒼朮 4（白朮も可）、
加エブシ 0.5-1

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で、汗が出、手足がこわばり、ときに尿量が少ないものの次の諸症

効能・効果：

関節痛、神経痛

原典：方機

出典：

解説：

桂枝湯に利水剤である朮（白朮または蒼朮）と附子をくわえたもの。冷えや湿気によって増悪する神経痛・関節リウマチの腫れや疼痛・脳血管障害後の半身不随やシビレなどに用いられる。

47.桂枝加朮附湯

参考文献名	桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草	朮	附子
診療医典 注1	4	4	4	4	2	蒼朮 4	0.5~1
治療の実際	4	4	4	4	2	4	0.5
応用の実際 注2	4	4	4	4	2	4	0.5
診療の実際 注3	4	4	4	4	2	4	0.5~1
処方集 注4	3	3	3	3	2	蒼朮 4	1
民間薬百科	4	4	4	4	2	3	1
処方分量集	4	4	4	4	2	蒼朮 4	1

〔注1〕 神経痛，リウマチ，冷え症の腹痛，半身不随，小児麻痺

〔注2〕 発汗ぎみで悪寒し，尿利がしぶって出にくく，あるいは尿意頻数があり，四肢の関節が痛んだり腫れたりし，四肢の運動が不自由なもの。脈は浮のことも沈のこともあるが，力が弱く，腹部の緊張もよくないものを目標とする。

関節リウマチ，神経痛，半身不随(脳出血後)，関節炎，痛風などに用いられる。

〔注3〕 脳出血後の半身不随，関節炎，関節リウマチ，神経痛

〔注4〕 麻痺，疼痛を目標とし，神経痛，リウマチ，小児麻痺，脊椎カリエス，脊椎脊髄腫瘍，半身不随などに用いられる。

処方番号：47A

処方名：桂枝加苓朮附湯（けいしかれいじゅつぶとう）

処方構成：

桂枝 4、芍薬 4、大棗 4、生姜 1-1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、蒼朮 4（白朮も可）、
加工ブシ 0.5-1、茯苓 4

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で、手足がこわばり、尿量が少ないものの次の諸症

効能・効果：

関節痛、神経痛

原典：方機

出典：

解説：

桂枝加朮附湯（47）にくらべて、よりむくみや眩暈が強い場合に用いる。

処方番号：48

処方名：桂枝加竜骨牡蛎湯（けいしかりゅうこつぼれいとう）

処方構成：

桂枝 3-4、芍薬 3-4、大棗 3-4、生姜 1-1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 3-4）、甘草 2、龍骨 2-3、牡蛎 3

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で疲れやすく、興奮しやすいものの次の諸症

効能・効果：

神経質、不眠症、小児夜なき、夜尿症、眼精疲労、神経症

原典：金匱要略

出典：

解説：

『金匱要略』第6章血痺虚労病の脈証と治療、第2項虚労の条に「失精」の証をあげ、「失精しやすいものは、下腹がひきつれ、陰茎の先が冷え、目まいがし、まぶたが痛むとある。髪が脱げ落ち、脈はひどく衰えて遅をあらわし、下痢し、貧血、失精する。脈がそれぞれ乳動微緊をあらわすのは、男子ならば失精し、女子ならば夢に交わる。これは桂枝加竜骨牡蛎が主る」と述べている。

48.桂枝加竜骨牡蛎湯

参考文献名		桂枝	芍薬	大棗	生姜	甘草	竜骨	牡蛎
診療医典	注1	4	4	4	4	2	3	3
治療の実際	注2	4	4	4	4	2	3	3
処方解説	注3	4	4	4	4*	2	3	3
応用の実際		3	3	3	3	2	3	3
基礎と診療	注4	3	3	3	3	2	3	3
漢方処方集		3	3	3	3	2	3	3
処方分量集		4	4	4	4	2	3	3
漢方処方		3	3	3	1	2	3	3

* 乾生姜に代えるときは1.5を用う。

〔注1〕 虚弱な患者で興奮しやすく、疲れやすいものに用いる。脈は大で力なく、臍部では動悸が亢進していることが多い。神経症、陰萎、早漏、無精、精欲減退、チック病、遺尿症などに用いる。

〔注2〕 体が頑丈でなく、神経過敏で興奮し、のぼせ易く、頭にフケが多く頭髪の抜けるものに応用する。精力減退、健忘症、夜尿症、不眠症。

〔注3〕 性的過労、陰痿、遺精などに用い、元気を回復させる。

〔注4〕 神経衰弱、性的神経衰弱、陰莖強直症、脳溢血、高血圧症。

処方番号：49

処方名：桂枝芍薬知母湯（けいししゃくやくちもとう）

処方構成：

桂枝 3-4、芍薬 3-4、甘草 1.5-2、麻黄 2-3、生姜 1-1.5（ヒネシヨウガを使用する場合 3-5）、白朮 4-5、知母 2-4、防風 3-4、加工ブシ 0.3-1

用法・用量：

湯

しばり：

体力虚弱で、皮膚が乾燥し、四肢あるいは諸関節の腫脹が慢性に経過して、痛むものの次の諸症

効能・効果：

関節リウマチ、関節炎、神経痛

原典：金匱要略

出典：

解説：

多発性関節炎・関節炎・変形性関節症・慢性関節リウマチなど四肢や軀幹のしびれ痛み・冷え・関節の腫脹などの寒湿痺の症候が基本にあり、関節に発赤・熱感・疼痛がみられるもの。舌質は淡紅・舌苔は白・脈は沈細。本方は寒湿痺の経過で局所関節に発赤・熱感のみられる寒熱挟雜の状況に対する処方である。

祛風・散寒・利湿の温性薬である桂枝・防風・附子・麻黄に、清熱の知母を組み合わせ、補血止癢の芍薬・健脾利水の白朮と炙甘草・生姜を加えたものである。

適応する病態は、「寒湿痺」の状態で、局所の炎症があきらかになったものに相当し、全身的には熱証のみられないことが特徴である。

附子は、下垂体-副腎皮質系の興奮作用をもち、心臓収縮力の増強と血管拡張作用により循環を改善し、また鎮痛・消炎に働く。桂枝は末梢血管を拡張して血行を促進し、脳の疼痛閾値をたかめて鎮痛する。麻黄は発汗・利尿し、防風も発汗・利尿・鎮痛し、いずれも浮腫を軽減する。白朮は組織中の水分を血中にひきこんで利尿により浮腫を消退させ、また消化吸收機能をたかめる。芍薬は滋養強壮し、炙甘草とともに筋肉のけいれんを緩解させる。知母は消炎・鎮静作用をもち局所の炎症をしずめ、芍薬とともに鎮痙に働き、鎮痛作用ももっている。生姜は胃腸の分泌をつよめ消化を助ける。

49.桂枝芍薬知母湯

参考文献名		桂枝	芍薬	甘草	麻黄	生姜	白朮	朮	蒼朮	知母	防風	附子	附子炮	炮附子	白川附子	用法・用量
漢方診療の実際	注1	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方診療医典	注2	3	3	1.5	3	3		4		3	3	0.5-1				
漢方処方応用の実際	注3	3	3	1.5	3	3		4		3	3	0.5				
臨床応用漢方処方解説	注4	3	3	1.5	3	3 (乾生姜1)		4		3	3	0.5-1				
金匱要略入門	注5	4	3	2	2	5	5			4	4		2			*1
漢方医学	注6	3	3	2	3	3		4		3	3	0.5				
新版漢方医学	注7	3	3	1.5	3	3		4		3	3	0.5				
症候による漢方治療の実際	注8	3	3	1.5	3	3		4		3	3	0.5				
漢方処方分量集		3	3	1.5	3	3 (乾1)		4		3	3	1				
改訂新版漢方処方集	注9	4	3	2	2		5			4	4			0.6 (又は白川附子1-2)		*2
増補改訂漢方入門講座	注10	4	3	2	2	ひね 生姜5	5			4	4				2	
新撰類聚方	注11	4両	3両	2両	2両	5両	5両			4両	4両		2両			*3
漢方薬入門	注12	3	3	1.5	3	1		4		3	3	1				
漢方あれこれ	注13	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
現代漢方入門	注14	3	3	2	3	3		4		3	3	0.5				
新古方薬囊	注15	4	3	2	2	5	5			4	4		0.4			*4
漢方精撰百八方	注16	4	4	2	3	1	4			4	4	0.5-1				
成人病の漢方療法		3	3	2	3	3		4		3	3	0.5-1				
漢方の診かた治しかた	注17	3	3	2	3	3		4		3	3	0.5				
1000万人の漢方診断と治療の実際	注18	3	3	2	3	3		4		3	3	0.5				
実用漢方療法	注19	3	3	1.5	3	3		4		3	3	0.3-1				
明解漢方処方集	注20	3	3	1.5	3	1.5		4		3	3	1 (23)				
漢法の臨床と処方	注21	4	4	2	3	1.5			4	2	3	0.5				

*1 以上九味、水700錢をもって煮て、200錢とし、70錢宛一日三回服用せよ。

*2 水280を以て煮て80に煮つめ滓を去り1日3回に分服。便法：常煎法

*3 右九味、以水七升、煮取二升、温服七合、日三服

*4 右九味を水一合四勺を以て煮て四勺を取り、滓を去り三回に分けて温服。一日三回服用。

注1

- ・葛根加朮附湯の證に似て、それよりも一段と虚して身体乾燥の状があるものを目標とする。
- ・関節リウマチ・神経痛等で身体乾燥の状あるものに用いる。

注2

- ・慢性関節リウマチに用いる。患者は栄養わるく、やせ、罹患関節は腫れ、その周囲の肉が落ち、皮膚が乾燥してつやのないものに用いる。
- ・関節リウマチや関節炎で、腫脹疼痛があり、特に膝関節が腫れて上下の筋肉が萎縮し、鶴の膝のようになったのによい。また下肢の運動および知覚の麻痺したものなどに用いられる。

注3

- ・四肢あるいは諸関節の腫痛が慢性に経過して、からだが衰弱、乾燥の状態にあるもの。
- ・この方は歴節(関節腫脹)が日を経て、関節が木のこぶのように腫起し、両脚に微腫があつて不快にだるく、痛みのため逆上してめまい乾嘔などするものを治す。また腰痛鶴膝風(膝関節が腫れ下腿が痩せたもの)にも用いる。(浅田宗伯)
- ・葛根湯証より痛が強く、しかも慢性化して虚状を呈し、四肢の厥冷もあつて、附子の証である。
- ・およそ痛風(関節リウマチなど)は初めの表証のあるときに、麻黄で強く発表すれば癒るものだ。もし慢性になつて熱がなく、痛みだけになつたらその時この方を用いる。(百々漢陰)
- ・関節リウマチ、神経痛など。

注4

- ・関節リウマチ・関節炎などで、腫脹疼痛があり、膝関節が腫れて、上下の筋肉が萎縮し、鶴の膝のようになったもの、また下肢の運動および知覚の麻痺したるものなどに応用される。

注5

- ・多数の四肢関節が疼痛して、身体は羸瘦して衰弱し、足脛部は浮腫して脱ける如く感じられ、疼痛のために眩暈を訴え、呼吸は短小となり、嘔気を催すとき。
- ・本条は急性、或は慢性関節リウマチの証治を論ずる。

注6

- ・関節リウマチ:慢性症で、患者は羸瘦し、罹患した関節が腫脹し、その周囲の肉が落ち、皮膚が乾燥しているものに用いる。

注7

- ・関節リウマチ:慢性のもので、栄養も悪く、痩せ、罹患関節が腫れ、その周囲の肉が落ち、皮膚が乾燥して艶のないものに用いる。

注8

- ・慢性関節リウマチに用いる。
- ・目標は、関節の腫脹、疼痛と皮膚が乾燥してガサガサしている点にある。

注9

- ・四肢或は関節疼痛、痩せて脚が腫れ力が抜け、或は関節だけが腫れてこぶのようになり、頭眩、息切れ、むかつくもの。
- ・関節炎、畸型性関節炎

注10

- ・関節炎

注11

- ・関節炎・リュウマチで腫脹疼痛し、特に膝関節では鶴膝風といって関節が腫れて前後の筋肉が萎縮しているものに使う。
- ・下肢の運動及び知覚麻痺に使った例がある。
- ・頭眩短気悪心が主で関節又は四肢の痛みを伴うもの。

注12

- ・四肢特に膝関節の疼痛、膝部瘤状変型、皮膚乾燥。
- ・慢性変型・急性関節リウマチ。
- ・関節疾患:痩せ型の人で、患部の関節は腫れているがその周囲の肉が落ち、皮膚に艶がないとき。

注13

- ・リュウマチ:すっかり慢性化してしまつて患部がかたくなり、からだの動きも不自由で、皮膚もカサカサしてきて、寝たつきりという最悪の状態に用いる。

注14

- ・慢性関節炎、リュウマチ
- ・慢性関節リュウマチ:体力が中等度、またはそれ以下の場合で、関節がはれて痛み、屈伸が困難で、皮膚は乾燥してカサカサになっていて、手足が冷えて、疲れやすい。

注15

・手足の関節が痛み、足が腫れて脱けそうに重く、頭がふらふらして息が早く、胸中むかむかとして嘔き氣を催す者。

注16

・諸肢節疼痛、身体尪羸(病弱で痩せてよろよろする)、脚腫脱するが如く、息切れがしてむかむかして吐き氣のするものに本方が適する。
・慢性関節炎、畸型性関節リウマチで関節のふしくれ立ったものに本方が効く。
・殊に肩胛関節の痛むものによい。
・結核性肩胛関節炎。結核性体質の者で肩胛関節炎を患うものでレントゲン写真で特に関節面破壊像の認められないもの。

注17

・慢性関節炎、リウマチ

注18

・関節リウマチ:慢性関節リウマチで、関節が腫れてその周囲の肉がおち、皮膚の光沢を失なっているものに用いる。患者は痩せて栄養が悪く、おかされた関節には熱感がない。
・慢性関節炎、リウマチ

注19

・リウマチ:体力が中等度以下で、あまり熱はなく、手と足、ことに指や腕の関節がはれて奇形を呈する(昔は奇形性関節炎といった)ような症状のある人。
・関節リウマチ:関節がふしくれだつて、しだいに奇形を呈してくる場合に用いる。

注20

・慢性で四肢(特に膝関節)に熱をもって疼痛し、木のコブのように変型していて、その周囲は反って肉落ち痩せているリウマチ。
・皮膚はカサカサに乾燥し体も痩せている。ときには両脚微腫していることもある。
・慢性畸型関節リウマチ。

注21

・慢性関節炎

処方番号：50

処方名：桂枝茯苓丸（けいしぶくりょうがん）

処方構成：

桂枝 4、茯苓 4、牡丹皮 4、桃仁 4、芍薬 4

用法・用量：

（1）散：1回 2-3g 1日 3回

（2）湯

しばり：

比較的体力があり、ときに下腹部痛、肩こり、頭重、めまい、のぼせて足冷えなどを訴える次の諸症

効能・効果：

月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、血の道症、肩こり、めまい、頭重、打ち身（打撲症）、しもやけ、しみ、湿疹、にきび

原典：金匱要略

出典：

解説：

瘀血症状に対して用いられる薬方は、大黄牡丹皮湯、桃核承気湯、当帰芍薬散、四物湯などがあるが、本方はこれらのなかでも繁用されるものの一つである。本方は駆瘀血剤として用いられ、血帯、鬱血、等による諸症状で、下腹部に抵抗があり圧痛をみとめる、（主として左下腹部）。体力は中程度でのぼせて赤ら顔の場合が多い。用法としては、のぼせ、めまい、頭痛、肩こり、耳なり、心悸亢進、足の冷え等のあるものに用いるが、症状としては、さほど強くはなく、便秘を伴うことがない。

『方函類聚』に「瘀血ヨリ生スル諸症ニ活用スヘシ、大黄附子ヲ加ヘテ血瀝痛及打撲疼痛ヲ治ス、桃核承気湯ハ如狂小服急結此方ハ其癥不去故也ヲ目的トス」とある（血瀝痛＝月経の量少量の為起こる腰痛、癥＝腹の結病、硬結）。

50.桂枝茯苓丸

参考文献名	桂枝	茯苓	牡丹皮	桃仁	芍薬	用法・用量
処方分量集	4	4	4	4	4	
診療の実際 注1	4	4	4	4	4	
診療医典 注2	4	4	4	4	4	*1
症候別治療	4	4	4	4	4	
処方解説 注3	4	4	4	4	4	*2
応用の実際 注4	4	4	4	4	4	
漢方入門	3	4	3	4	4	*3
実用漢方療法	4	4	4	4	4	
診かた治しかた	4	4	4	4	4	
漢方あれこれ	4	4	4	4	4	

*1 各等分を煉蜜で丸として1日3回3.0ずつ服用する。

*2 各等分細末とし蜂蜜で煉り10グラムぐらいの大きさ(金匱には兔の尿ぐらいの大きさともある)の丸とし毎日食前に1丸を服し効がなければ3丸に至る。一般には空気銃の弾丸ぐらいの大きさ(10粒0.1グラムぐらい)とし1日2-3グラムずつ3回服用する。また桂枝茯苓湯または桂枝茯苓丸料と称し、煎じて服用してもよい。煎じてのむ場合が比較的多い。

*3 各等量末として蜂蜜で煉り1回2.0ずつ3回服用。

〔注1〕 桃核承気湯のようで便秘の症がなく、一般症状が緩和である。故に下腹部に抵抗圧痛のある腫塊をふれることはあっても、桃核承気湯の腹証として挙げた急結を、証明することはない。

〔注2〕 下腹部に抵抗のある部位を認め、この部に圧痛があれば、瘀血証の目標とする。このような患者の腹部は一般に弾力に富んで、緊張のよいものが多い、貧血の傾向はなく、また軟弱無力のものは少い。

〔注3〕 婦人に多いのであるが、もちろん婦人ときまつたわけではなく、男子にも頻繁に用いられる。その体質傾向はしっかりしていて、実証で赤ら顔が多く腹は大体において充実している。左右の臍傍、とくに左側の下腹部に充実した抵抗を触れ、圧痛を訴えることが多い。全体として桃核承気湯よりは静的で固定的である。脈は緊張があり、沈んで遅い場合が多い。主訴はのぼせ症で、頭痛、肩こり、めまい、足冷えを訴える。下腹の張り、疼痛のあることもある。

〔注4〕 体格中ぐらい、虚実中等の体質の人が、瘀血による諸症状を呈し、便秘の傾向がなく、症状が緩和なものである。

(1) 瘀血の一般症状は、口が乾燥してつねに口に水を含んでいたい。尿利が多い。体温が上昇していないのに全身または局部的に熱感を覚え、唇や舌の辺縁が暗紫色を呈し、皮膚がくすんで浅黒く、あるいは汚らしい発疹や肌荒れ(いわゆるさめ肌)が出る。大便が黒色で臭気強い。青すじや諸種の出血傾向などである。(2) 諸種の出血傾向としては下血、子宮出血、鼻出血、歯齦出血、皮下粘膜下出血(紫斑)などがある。(3) 女子では月経不順、無月経、月経過多、月経寡少などの月経異常、月経痛その他の月経困難、不妊症あるいは流産ぐせなどのほか、下腹痛や帯下などがある。(4) 腹証としては、下腹に圧痛を伴う抵抗や腫瘍をみとめるが、腫瘍やガス塊と区別しなければならない。(5) 脈は沈んでいるものが多い。

処方番号：50A

処方名：桂枝茯苓丸料加薏苡仁（けいしぶくりょうがんかよくいにん）

処方構成：

桂枝 4、茯苓 4、牡丹皮 4、桃仁 4、芍薬 4、薏苡仁 10-20

用法・用量：

湯

しばり：

比較的体力があり、ときに下腹部痛、肩こり、頭重、めまい、のぼせて足冷えなどを訴えるものの次の諸症

効能・効果：

にきび、しみ、手足のあれ、月経不順、血の道症

原典：本朝経験方

出典：

解説：

桂枝茯苓丸に、民間薬としてイボ取りや皮膚のあれによく使われる薏苡仁（ハトムギ）を加えた処方で、瘀血（とくにうっ血性体質の）が原因で起こる皮膚のあれやにきび、皮膚病に、腹証にしたがって用いられる。

50A.桂枝茯苓丸料加薏苡仁

参考文献名		桂枝	茯苓	牡丹皮	桃仁	芍薬	薏苡仁
処方分量集		-	-	-	-	-	-
診療の実際	注1	-	-	-	-	-	-
診療医典	注2						
症候別治療	注3						
処方解説	注4	-	-	-	-	-	-
後世要方解説		-	-	-	-	-	-
漢方百話	注5	-	-	-	-	-	-
応用の実際		-	-	-	-	-	-
明解処方	注6						
実用漢方療法	注7	4	4	4	4	4	10

〔注1〕 壯実証のもので、清上防風湯、荊芥連翹湯が効なく、上衝して鬱血性の傾向があり、口唇・舌等が黒紫色を呈し、左側下腹部に抵抗・圧痛があり、瘀血による面疱。

〔注2〕 瘀血の腫症のある甲状腺腫、椎間板ヘルニア、急性乳様突起炎、肝斑(しみ)、睾丸炎。子宮がん(初期で未だ体力の衰えないとき、下腹部に抵抗圧痛があり、帯下が始まったというようなどとき、光線治療と併用して服薬するがよい。薏苡仁10.0)、みずむし(瘀血のある体質のもので、丘疹状をなし、紅暈を帯び、灼熱性瘙癢感のあるもの。薏苡仁5.0)進行性指掌角皮症(しっかりした体格の婦人で、多血症、下腹部に瘀血があつて抵抗圧痛があり、月経痛等を補うもの。薏苡仁6.0)、にきび(うっ血性の体質のもの、婦人で上衝があり、口唇が紫色で、下腹部に抵抗圧痛があり、月経異常などのあるもの。便秘のものには必ず大黄を加える)、鞏皮症(薏苡仁10.0)。

〔注3〕 手掌角皮症や手掌・手甲等の荒れるものにも用いられる。薏苡仁1日20gを加える。

〔注4〕 乳腺症に本方を10日分与えた。ところが10日分でほとんど腫れが消失。

〔注5〕 腹証にしたがつて、レイノー病、しみ、しろなまず、魚の目、乳腺症に効あり。

〔注6〕 桂枝・茯苓・牡丹皮・桃仁・芍薬各等分以上を末として蜂蜜で練り、1回2.0づつ3回服用。または丸量の2～3倍を煎剤としてもよい。これに薏苡仁10.0を加える方が青年の尋常性座瘡(にきび)には速く効くようである。

〔注7〕 にきび：桃核承気湯の目標とほぼ同じであるが、それよりやや体力が落ちていて、のぼせが少なく、便秘がなく、腹力もやや落ちている場合、臍膀の圧痛と月経障害があり、薏苡仁を加えて用いたほうがよい効果があることが多い。

処方番号：50B

処方名：甲字湯（こうじとう）

処方構成：

桂枝 4、茯苓 4、牡丹皮 4、桃仁 4、芍薬 4、甘草 1.5、生姜 1（ヒネショウガを使用する場合 3）

用法・用量：

湯

しばり：

比較的体力があり、ときに下腹部痛、肩こり、頭重、めまい、のぼせて足冷えなどを訴える次の諸症

効能・効果：

月経不順、月経異常、月経痛、更年期障害、血の道症、肩こり、めまい、頭重、打ち身（打撲症）、しもやけ、しみ

原典：医事小言

出典：

解説：

『叢桂亭医事小言』（原南陽）を原典とする。『叢桂亭医事小言』の腸癰・鼓腸など項で治験例を挙げ、十巻の「叢桂亭蔵方」で処方を解説している。

桂枝茯苓丸に生姜と甘草を加えたものである（医事小言補正）。

桂枝茯苓丸を煎薬すると、胸にもたれて不快な思いをすることが多い。これを未然に防止するように、胸元をすっきりさせる生姜と甘草を加えたものである（『薬局製剤漢方 194 処方の使い方』 埴岡博・滝野行亮 じほう）。

50B.甲字湯

参考文献名	桂枝	茯苓	桃仁	牡丹皮	芍薬	生姜	甘草	乾生姜	用法・用量
処方分量集	各等分	各等分	各等分	各等分	各等分	3	1.5	-	*
診療の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	
診療医典	4	4	4	4	4	3	1.5	-	
症候別治療	4	4	4	4	4	3	1.5	-	
処方解説 注1	4	4	4	4	4	-	1.5	1	
後世要方解説	-	-	-	-	-	-	-	-	
漢方百話	-	-	-	-	-	-	-	-	
応用の実際	-	-	-	-	-	-	-	-	
明解処方 注2	3	3	3	3	3	1.5	1.5		

* 桂枝茯苓丸料中に甘草1.5、生姜(乾)3を加う。

[注1] 原南陽は、この方を腸癰（虫垂炎）の常用剤としていた。

[注2] 瘀血が原因で起こすリウマチ，神経痛に用いる。

処方番号：51 処方名：啓脾湯（けいひとう）

処方構成：

人参 3、白朮 4、茯苓 4、蓮肉 3、山薬 3、山楂子 2、陳皮 2、沢瀉 2、大棗 1、
生姜 1（ヒネシヨウガを使用する場合 3）、甘草 1（大棗、生姜はなくても可）

用法・用量：

- （1）散：1回 1-2g 1日 3回
- （2）湯

しぼり：

体力虚弱で、やせて顔色が悪く、食欲がなく、下痢の傾向があるものの次の諸症

効能・効果：

胃腸虚弱、慢性胃腸炎、消化不良、下痢

原典：万病回春

出典：当壮庵家方口解

解説：

四君子湯が基本処方と考えられ、『和剂局方』の参苓白朮散と処方も類似した同様に下痢にとくに小児の下痢に用いられる。原方では啓脾丸と呼び、煉蜜（蜂蜜を煮つめたもの）で丸剤とし、米の煮汁（米湯）で空腹時に服用することになっている。

51.啓脾湯

参考文献名		人 参	朮	茯苓	蓮 肉	山 藥	山 査 子	陳 皮	沢 瀉	大 棗	生 姜	甘 草
万病回春 卷小児科泄瀉	注1	1両	1両 ^{*1}	1両	1両	1両	5銭 ^{*2}	5銭	5銭			5銭
診療医典	注2	3	4	4	3	3	2	2	2			1
症候別治療	注3	3	4	4	3	3	2	2	2			1
応用の実際	注4	3	4	4	3	3	2	2	2			1
処方解説	注5	3	4	4	3	3	2	2	2	1	1 ^{*3}	1
漢方百話	注6	3	4	4	3	3	2	2	2			1
漢方あれこれ	注7	3	4	4	3	3	2	2	2			1
明解処方	注8	3	3 ^{*1}	3	3	3	2	2	2	1	1	1
処方分量集		3	4	4	3	3	2	2	2			1

*1 白朮 *2 山査肉 *3 乾生姜

〔注1〕 啓脾丸：消食止瀉，止吐，消痞，消黄，消脹，定腹痛，益脾健胃，右為末，煉蜜為丸，梧桐子大，每服二三十丸，空心米湯下，或米湯研化服亦可，小兒常患傷食，服之立愈。

〔注2〕 本方は四君子湯を基礎として脾(胃腸消化器系統)を補い，健胃，利尿を図ってさらに消化の剤を配したもので，虚証で貧血性，脈腹ともに軟弱となり，食欲不振，水瀉性下痢が長びいて止まず，ときに腹痛，嘔吐の気味あるものによい。大人でも脾胃虚弱の慢性胃腸炎や腸結核などにも用いてよいことがある。……以上の目標にしたがって本方は小児消化不良症，慢性胃腸カタル，水瀉性下痢，腸結核，病後の食欲不振などに用いて胃腸を強壯にする。

〔注3〕 慢性の下痢に用いる。眞武湯や胃風湯を用いるような下痢で，これらを用いても効をみない時は用いてみるがよい。裏急後重はなく，腹痛はないか，あっても軽い。泡沫の多い下痢便のことが多い。1日に1，2回位の下痢がつづく。このような時に，私は啓脾湯を用いるが，參苓白朮散を用いてもよい。

〔注4〕 慢性の下痢に用いる。眞武湯や胃風湯を用いるような下痢で，これらの処方効かないときに用いる。裏急後重がなく，腹痛はないことが多く，あっても軽い。泡沫の多い下痢で，ガスとともに排出することが多い。回数は少なく，1日に1～3回位の下痢である。參苓白朮散の証とよく似ていて，予め区別することはむずかしい。

〔注5〕 原方(万病回春)は蜜丸，每服1～2g，重湯で服す。あるいは末を重湯で服するも可。しかし一般には煎じて服用している。

虚証でいわゆる脾胃虚弱の水様性下痢症，小児の消化不良によく用いられる。主として小児の消化不良症，大人でも慢性胃腸炎や腸結核に応用され，また病後の胃腸の強壯剤として使われる。

〔注6〕 この方は小児の消化不良で，泄瀉性下痢を繰返えし，栄養衰え，筋肉弛緩し，貧血甚しく，食思衰え，嘔気などを伴い，腹張り，しかも軟弱で，羸瘦はなほだしいものに用いられる。

〔注7〕 慢性腸カタル：もっと胃腸が弱く，ふだんからすこし食べすぎると，すぐ下痢するようなタイプには六君子湯を用いる。症状が眞武湯のもの(軽い腹痛はあるが口はかわかず吐き気もない，しかし冷え症で1日に2，3回下痢するとき)に似ているが，これを飲んでもなおらず，皮膚がかさかさしてくるときは啓脾湯か參苓白朮散を用いる。この二つはどちらかといえば，消化促進剤である。つまり全身の改善などとのんびりしてられないので，とりあえず胃腸の調子からととのえていこうというわけである。

〔注8〕 煎剤，または蜜丸とする。後世方なら四君子湯，古方なら人參湯を用いるような，胃寒によって起る嘔吐を伴った下痢の症状が慢性化して脈も腹状も軟弱で食欲不振が劇しく，その上神経的にもいわゆる“痼性”を起こしている場合に用いられる。また大病後の胃腸機能の亢進剤に用いる。主として小児に適應者が多く，もし本方無効のときは甘草瀉心湯，眞武湯などを考える。

処方番号：52

処方名：荊防敗毒散（けいぼうはいどくさん）

処方構成：

荊芥 1.5-2、防風 1.5-2、羌活 1.5、独活 1.5-2、柴胡 1.5-2、薄荷葉 1.5-2、連翹 1.5-2、桔梗 1.5-2、枳殼（又は枳実） 1.5-2、川芎 1.5-2、前胡 1.5-2、金銀花 1.5-2、甘草 1-1.5、生姜 1

用法・用量：

湯

しばり：

比較的体力があるものの次の諸症

効能・効果：

急性化膿性皮膚疾患の初期、湿疹

原典：万病回春

出典：

解説：

化膿症で発熱・腫脹・疼痛を伴うものに使われる。